

辻清明教授の古稀をお祝いして

社会科学研究所長 石 渡 茂

日本官僚制の研究によって行政学における金字塔を樹立された辻教授が、この度古稀を迎えられることとなった。社会科学研究所の所員で、辻教授の研究分野に近い方々が中心となって、ささやかな古稀記念号という思いが結実したのが、本特集号である。

辻先生は、1937年東京帝国大学卒業後、直ちに同大学法学部政治学科の助手に就任し、1942年には同学部助教授に昇進され、さらに1951年に同学部教授に就任された。その間「現代官吏制度の展開と科学的人事行政」(1942年)から「日本における行政学の展開と課題」(1976年)に至るまで一貫して行政学の中心課題である官僚制について、日本だけでなく広く欧米にまで研究対象を拡げられて比較研究を行なわれて来られたと伺っている。その成果の一つが、『日本官僚制の研究』(1952年、1969年改訂)となっていることは衆知のところである。官僚制が中央政府を中心としたものであるのに対して、辻先生が地方政府にも等しい研究上の関心の比重を置かれていることも見逃してはならない。もっとも辻先生は、「地方政府」と言われずに「地方自治体」という用語を用いられていることを、最近辻先生を主査として行なわれたある博士論文研究計画書審査の席上でお聞きして、先生の行政学研究上のスタンスを知らされた思いであった。

1974年東京大学法学部教授の職を辞されて、本学教養学部社会科学科教授となられ、さらに1979年本学大学院行政学研究科大学院教授に就任されて今日まで、辻先生の御研究は国際行政学の分野にまでおよんでい

る。その間先生は学部学生をはじめ多くの大学院生の御指導に当たられた。その成果はやがて若い研究者達による幾つかの学位論文という形で結実するであろう。本研究所をはじめ行政学研究科は、故蠟山政道先生の学恩により今日に至っていると云っても過言ではないであろう。その蠟山先生の直系でおられる辻先生が古稀を迎えられるということは、大学院教授としての職を退任されるということでもある。行政学研究科長をも兼任する者として、所員の方々の思いも含めて、辻先生の御指導に感謝申し上げたい。

辻先生の教少ない翻訳書(渡辺保男教授との共訳)の中に、H. J. ラスキ『議会・内閣・公務員制』(岩波書店, 1959年)があるが、辻先生の御研究の中でラスキの政治思想の占める位置について、さらにラスキとの関連で、戦後の日本の中央および地方行政組織の成立と変遷について、先生がどのような御感想をお持ちなのかというような点について、もっと親しくお聞きしておくべきであったと後悔の念を深くしている今日此頃である。4月以降も客員教授としてこれまでと同じように、大学院行政学研究科、比較文化研究科および学部社会科学科でお教えいただくことになっているので、キャンパスでお元気な先生のお姿を拝見することができることは、我々にとって、大変幸いなことである。願わくは、辻先生の御健康が維持されて、ますます辻行政学が大成されることを、私が熱望していることをこの機会に申し添えたい。